シングルからみるコミュニティーとつながり
―アメリカのコンサーバティブ・メノナイトのシングル女性たち―

中　朋美

Singlehood and Conservative Mennonite Communities

NAKA Tomomi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第14巻　第3号　抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.3

平成30年3月26日発行　　March 26, 2018

シングルからみるコミュニティーとつながり
－ アメリカのコンサーバティブ・メノナイトのシングル女性たち-

中朋美*

Singlehood and Conservative Mennonite Communities

NAKA Tomomi*

キーワード：シングル，キリスト教，コミュニティー，メノナイト，アメリカ
Key Words: Singlehood, Christianity, Community, Mennonites, United States

Ⅰ. サラの結婚式

2016 年 11 月の中旬，アメリカのペンシルバニア州に住むコンサーバティブ・メノナイトの知人のメアリーから，“big news”として，義理の妹のサラが翌年の 1 月に結婚するとの知らせが届いた。サラは当時 54 歳で，今まで一度も結婚したことがなかった。相手は 69 歳で教会ではビショップ(bishop)としていくつかの教会の指導的な役割を担い，妻と死別した男性であること，そしてサラは結婚後，男性の住むテキサスに転居するとのことだった。さらに結婚式はペンシルバニア州で開かれるのだが，出席することはできるかとの質問が記されていた。メアリーが“big news”として私に伝えたように，長年独身でいたサラの結婚は私も含め周囲の人々にとって，あまり想定していなかったことだった[1]。

この論文では，サラの結婚をめぐる人々の反応を交えながら，コンサーバティブ・メノナイトと呼ばれる保守派のプロテスタント一派のコミュニティーにおけるシングル女性の存在について考察する。コンサーバティブ・メノナイトの間では，聖書の解釈に基づき，女性は父や夫に仕え，家庭を守り，子供を育てるということが奨励されている。また教会活動や宗教行事が家族単位で行われることが多いことから，結婚し，自分の家庭を築くことがいわば普通と考えられている。しかしすべての女性が結婚しているわけでなく，様々な年代の独身者は存在する。そういった女性たちがどのように教会の一員として宗教的コミュニティーで生活を営んでいるのかについて，例を交えながら考察する。彼女たちは，日々の生活において独身者であることから生じる様々な制約も受けている。しかしその状況でも，彼女たちが自分たちなりの場所や役割を見出している様子や，彼女らの存在についてのコミュニティー側のとらえ方について論じる。

Ⅱ. シングルへのまなざし

シングルという言葉は，多義的で，文化や社会によってさまざまな意味を含んでいる。シングルといっても結婚せず，実質的に一人で生活している場合を意味する時もあれば，既婚者が何らかの理由で配偶者と一緒に生計を立てていない状態やそういった人を指すこともある。このようにあい

*鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース

まいな表現ではあるが，ここではコンサーバティブ・メノナイトの人々が用いているシングルという表現を対象とし，一度も結婚していない人を指す言葉として用いる。

コンサーバティブ・メノナイトの間では，サラのように独身の女性はしばしば“single sister”と呼ばれている。キリスト教徒の中には信仰をともにする教会員の人たちを兄弟姉妹として呼ぶことがある。一般的にメノナイトの間では個人に対してシスターやブラザーという表現を使う場合はそれほど多くない[2]。しかし教会の女性や男性を集団として呼びかけたりする際にはシスターやブラザーといった表現を使うことがある。またここで注目する未婚の女性の場合は，独身者ということを踏まえてシングルシスターという言葉で呼ばれることがある。ここでのシングルとは結婚したことがないということで，必ずしも一人で暮らしているというわけではない。特に高齢のシングルの人は，ほかのやや若いシングルの人と同居している場合がある。

シングルと呼ばれる人の存在やそういった人をめぐる歴史は文化や社会によって多様である。社会によっては成人のほぼ全てが何らかの形で結婚しており，シングルの人が最近までごく少数派であった場合もある[3]。そういった背景もあってか，シングルの人々の存在は社会的に注目を浴びてきたのは比較的最近である。異文化の考察をしてきた文化人類学でも同様で，家族といった再生産に直接的に携わる人々や，儀礼等の文化的な活動が主な調査対象となってきた。一方，シングルの人はそのような文化や社会の再生産とは直接的な関係がないとされ，注目されることが少なかった（椎野，2014）。

アメリカ社会も同様で，家族に注目が注がれがちであった。例えば Dorothy Smith（1993）は，アメリカでは父と母，そして子供といった家族形態がしばしば基準とされ，それがアメリカの標準的な家族モデル（the Standard North American Family, 以下 SNAF）として政策や文化的，社会的側面で重要な役割を果たしてきたと指摘している。もちろん現実にはこのモデルに当てはまらない家族の形もある。現在では様々な研究者が，理想とされる SNAF とそれに合わない現実との間にどのような対立や妥協がされてきたのかについて調査している。

アメリカの宗教コミュニティーにおいても SNAF は影響力のあるモデルと考えられてきた。Edgell と Docka (2007) が指摘しているように，宗教的解釈を用いて，SNAF 型の家族を理想化し，道徳的に正しい唯一の形であるという結婚観や文化が広められ，それ以外の家族構成はあたかも間違ったもの，あるいは不幸な状態とされた。そして SNAF モデルに当てはまらない生き方している人には，何等かの事情や理由が必要とされることが多かった（Edgell and Docka, 2007）。

しかし家族の在り方は多様であり，家族を一つのユニットとしてとらえることによって見逃してしまう社会や文化内の動きもある。ここではアメリカの宗教グループの一つであるコンサーバティブ・メノナイトを取り上げながら，シングルの女性たちの選択や教会コミュニティー側のシングルの女性たちのとらえ方を検討し，コンサーバティブ・メノナイトの宗教的コミュニティーにおけるつながりについて考えていく。

II. コンサーバティブ・メノナイトとシングル

コンサーバティブ・メノナイトと呼ばれるグループは，メノナイト教派の中のサブグループである。メノナイト教派は，北米アメリカを中心に多く存在するプロテスタント一派のアナバプティスト（再洗礼派とも呼ばれる）グループの一つである。メノナイトグループの信仰上のルーツは，ヨーロッパで 16 世紀に起こった宗教改革時にさかのぼることができる。メノナイトの祖先たちは，当時一般的だった幼児洗礼に反対し，信者になるかどうかの判断を十分に自覚的に行える大人による洗

礼や政教分離を強く主張した。その結果，ヨーロッパ各地で権力者から迫害を受け，それを逃れてアメリカ大陸に移住してきた（Redekop, 1989）。現在では北米のみならず，世界各地にメノナイト教会があり，現地の人も含めた文化的にも民族的にも多様な教会員がいる（Kraybill & Hostetter, 2001）。

メノナイト教会や教会員といってもすべてが同じような生活や信仰形式をとっているわけではなく，聖書の教えをどのように日常生活に適用するかの解釈の違いから様々なサブグループが存在する。サブグループの成立の際には，伝統的な教会の規律を守っていこうとする人々と，規律を再解釈し，柔軟な対応を進めていこうとする人々との間での意見の対立が背景となる場合が多い。ここで取り上げるコンサーバティブ・メノナイトグループは，1960 年代ごろを中心に，多くのメノナイト教会が教会規律の見直し，服装やリクリエーションに対する教会での規律を非厳格化したのに反対したコンサーバティブ・メノナイト・ムーブメントの影響を受けて登場したものが多い（Scott, 1996）。

コンサーバティブ・メノナイトの中でもさまざまな違いがあるが，一般的に教会員は聖書の解釈に基づいて定められた教会による服装や行動について一定の規律を守ることが求められている。規律には，男女とも肌の露出が少ないスタイルの服装を着用すること，世俗的で聖書とは関係のない情報や価値観を伝えるテレビやラジオやインターネットの使用の禁止などがある。また男性は教会や家庭生活でのリーダーシップをとること，女性は家庭を守り，男性をサポートするといった役割が重視される(Scott, 1996)。

結婚に対しての規律もあり，デートや婚姻の申し込みのイニシアティブは男性がとるべきとされている。また配偶者が生存している限り，離婚や再婚を認めず，夫婦間で信仰をともにするものでなければ教会での婚姻が認められない。しかし結婚しないこと自体に問題はなく，未婚の教会員はどの教会でも存在する。

しかし，アメリカでの一般的な社会状況と同様に，メノナイト教派の間でもシングルの立場や声が取り上げられる機会は多くはなかった。メノナイト教派内ではかつては広く男性が教会活動や家庭でリーダーシップをとることが奨励されていた(Redekop, 1989)こともあって，歴史的な記録はしばしば男性によって書かれ，その語り手の中心は男性だったということもその背景にある。女性の側からみた記録も存在しなかったわけではないが，しばしば男性の視点が歴史やそのほかの研究の中心となってきた。Marlene Epp の 1987 年のエッセイのように，1980 年代ごろになってようやく，メノナイト女性が研究対象としてとらえられてこなかったことが指摘されるようになった(Fast and Buller, 2013)。

しかし女性に焦点が置かれるようになってからも，その中心は家族を持つ人であった。メノナイトのコミュニティーにおいては，その構成の中心に家族が据えられる場合が多く，研究者のまなざしも家族に向かいがちであった。例えば先に述べた研究に女性の視点を取り入れる重要性を指摘した Marlene Epp は以下のように家族の重要性を述べる。

> The Mennonite family, either nuclear or extended, was a central institution for organizing community life and transmitting beliefs. A family functioned as an economic unit, a migration unit, and was the building block for village and settlement formation.[4]

ここで Epp は核家族と拡大家族（nuclear or extended）を言及しており，家族形態の多様性の配慮が見られる。また家族自体がメノナイトの教会活動やそのほかの場面で基礎となるユニットでああったことの指摘は現在でも重要である。しかし家族の単位にぴったり当てはまらないシングルの存在や役割については言及されず，その周辺的な存在としての位置づけを感じさせる。

もちろんメノナイトの研究の中には先ほど述べた SNAF モデルに当てはまらない家族の状況に着目したものもある。Epp もその著書の *Women without Men: Mennonite Refugees of the Second World War* (1999) では，第 2 次世界大戦によって，それまでの家族生活が困難となり，難民として新しい土地で生活を再建していく女性たちに焦点を当てている。しかしこの本のように，メノナイトの女性が注目を浴びる場合においても，その中心は家族の一員としての女性，特に母親としての立場からの考察が中心である。同様に 2013 年に出版された *Mothering Mennonite* という本でも，Buller と Fast は，母親であることに特に注目する必要があると論じている。また，小説や料理本などの一般書ではさらにその傾向が強い。小説でメノナイトの女性が取り上げられる場合は，母親として，あるいは結婚を控えて様々な葛藤を体験する若い女性が中心となる場合が多い[5]。料理本では，家族の食を担う母親としての存在が強調されている。

シングルの人たちが直接取り上げられる場合でも，その状態はしばしば様々な事情によって生じた予期せぬものとしてとらえられることが多い。例えばコンサーバティブ・メノナイトの出版社から再構成してまとめられたシングルについてのブックレットの冒頭では，以下のような記述が冒頭に登場する。

> Subjects such as dating, engagement, and marriage are more popular than singlehood. Perhaps that is because more people marry than stay single, and perhaps also because most people want to be married. But it means, unfortunately, that sometimes people find themselves in situations they never have given much thought to, and just unfortunately, situations which nobody else has given much thought to either[6].

引用文の最後の方に，シングルという状態が今まで本人にとっても，周囲の人にとっても十分に考えてこられなかったものであると述べているように，シングルであることが選択した結果というよりも予期しない状態として紹介されている。もちろん，この本の趣旨はそういったシングルの人々自身や周辺の人々が聖書の教えに基づき，どのようにシングルであることを捉えていくべきかについて考えていこうとするもので，シングルであること自体に対して否定的なものではない。しかしここでもシングルという状態やシングルの人について，あまり注目してこられなかったことが前提となっている。

このようにシングルの人々はしばしば考察の対象とならなかったり，最後のブックレットのように，対象となった時でもコミュニティーが対峙しなければならない課題として取り上げられたりする場合が多い。では実際のシングルの女性たちやそれを取り巻くメノナイトコミュニティーはどうなのだろうか。以下ではコンサーバティブ・メノナイトの女性たちの例を取り上げながら，シングルの人たちとコンサーバティブ・メノナイトのコミュニティーの関係を考察する。

III. シングルとなるプロセス

聖書には結婚しないシングルの人の存在にも言及があり，コンサーバティブ・メノナイト間でもシングルであること自体には問題はないと広く考えられている。しかし教会や家庭において，例えば日ごろの遊びや聖書に基づく話の中で，家庭を持つことが当然のこととして登場するため，多くの教会員の子供たちは漠然としたイメージではあるが,成長したら結婚し,家庭を持つ将来像を持っている。自分から選んでシングルとなる人も全くいないわけではないが，それよりも，時間の経過とともに，徐々に自他とも認めるシングルとなる場合が多い。

シングルの人には男性も女性もいるが，一定の年齢以上になると，女性の方が圧倒的に多い。幾人かの教会員に尋ねてもその理由ははっきりしないが，家庭を持つことが奨励されていること，そして男性は女性と違い，デートなど結婚に向けてのイニシアティブを自分からとれることなどが関連していると思われる。一方，女性は家庭を守り，子供を育てたいと思っていても，自分から積極的に男性にアプローチできないので，希望していても結婚できない場合がある。

人数比だけでなく,シングルとして生きていく状況も男女では微妙に異なる。男性は早くからリーダーシップ的な役割を求められ，家族を経済的に養うことが求められるのに対し，女性はともすれば補助的な役割を期待されている場合が多い。そのためシングルの女性が，自分で生活がしっかりできるだけの仕事をもつようになるプロセスは，男性とは異なっている点もあるし，男性と違ったチャレンジがあることも多い。

とはいえ，男女ともシングルになる特別のプロセスが最初からある訳ではなく，成長し，一人の大人の教会員になる過程と重なる。第一歩は，学校に通うことを終え，何らかの仕事をはじめることである。コンサーバティブ・メノナイトの間では，基礎教育は重要とされるが，高等教育は人間中心的な価値観を広めるので，メノナイトとしての信仰を深めていくうえでふさわしくないとされる。アメリカでは州によって義務教育の機関が異なるため多少年齢は異なるが，15 歳から 16 歳，学年でいえば第８から９学年（日本での中学校レベル）ぐらいで，多く人たちが学校に行くことをやめるようになる。男女とも違いはなく，家庭とその子の選択で，義務教育期間が終了する誕生日の日をもって学校に来なくなる人もいれば，学年が終了するのをまって学年末で学校を去る人もある。

その後，10 代半ばの若者たちは，それぞれ何らかの仕事を始めるようになる。最初は男女とも手伝いといった補助的な仕事が中心である。比較的女性の方がインフォーマルな仕事に就くことが多く，またその期間も長い。例えばクリスティーナは 16 歳で学校に行くのを終了した後，２年ほどは自宅で母親の手伝いをして日々を過ごしていた[7]。８人兄弟の真ん中の彼女の家では，まだ在学中の兄弟姉妹が多く，家事手伝いが必要な状況だった。一方，同じ年に学校を終えたジョンは，学校を終えて間もなく教会が経営する印刷所の手伝いなどを始めるなど，家庭以外の場所で定期的な仕事をし始めるのもクリスティーナよりも早かった。

もちろん女性も徐々に家の外での仕事をするようになる。クリスティーナの例でいえば，家事手伝いの後に不定期ではあるが教会員のロンダの家庭で仕事をするようになる。朝，クリスティーナはロンダの家に向かい，農作物の収穫や季節の野菜や果物の缶詰や冷凍保存といった作業を手伝うとともに，各家庭での掃除，洗濯，子供たちの世話などをし，夕食前に家に戻ってくる。こういった仕事に対して何らかの報酬を得ることが多いが，その内容はまちまちで，正式な取り決めがない場合もしばしばである。クリスティーナの場合，チーズや季節の野菜や果物を受け取っていたときもあった。

次第に仕事も定期的なものとなっていく。17 歳のジュディスは，大叔父に頼まれて，認知症の妻と彼の家の家事手伝いとして週に２回，働いていた。このころまでには彼女は運転免許を取得していて，一人で働きに出やすくなったという事情もある。ほかの 10 代の後半の女性の中には，親戚や知人以外の紹介で仕事を見つける場合もある。例えばキャッシーは 17 歳の時地元の店で仕事をするようになる。そこでの仕事は，家庭の清掃や教員として働く以外で，若いコンサーバティブ・メノナイトの女性にとっての地元で唯一の仕事場として有名であり，キャッシーもそこで働くようになったそうだ。

外で働きはじめて間もない時期は，フルタイムで最初から働き始める人は少なく，給与も最低賃金の水準である場合が多い。一人で生計を立てることよりも仕事を学び，社会経験を積むことに焦点があてられていることが多い。得られた給与の扱いは，家庭で異なるが少なくとも一部は可処分所得として自由に使える場合が多く，ちょっとした買い物や外出の際に使われる場合が多い。

キャッシーの例にあるように，若いコンコンサーバティブ・メノナイトの人々はどこでも仕事をするわけではなく，自分たちの信仰にとって好ましくない仕事場を避ける。避けられる仕事場としては，テレビやラジオが使用されている仕事場や，服装が派手だったりと素行が不適切な従業員がいたり，従業員同士の関係があまりにも自由で，聖書の教えと異なるような性別役割や人間関係が生じやすいところなどである。

このような仕事場の選択は，コンサーバティブ・メノナイトの教会や教会員が今ほど多く存在するようになる前の教会員の体験に由来する[8]。1960 年前後に生まれ育った教会員の中には，コンサーバティブ・メノナイトの信仰がよく理解されず，仕事場で飲酒や映画などに誘われるなど自分たちの信仰に反する行為に誘われたり，信仰を理由としてそういった行動をしないことをからかわれたりした体験をした人がいる。そういった体験から，現在でも仕事場の環境に注意が払われている。中でも若い人は教会員となることを決意して日も浅く，信仰や価値観が異なる人に対してどのように対応していくかの経験が少ないので，教会関連コミュニティーのネットワーク内で仕事を見つけることが多い。

しかし好ましい仕事場はどこにでも豊富にある訳ではない。ペンシルバニア州やオハイオ州といったメノナイト教会や教会員が多いところは適した仕事場が比較的見つけやすい。しかしキャッシーの場合のように，場所によってはコンサーバティブ・メノナイトの宗教観に合うような労働条件が整っているところが少ない場合もある。このように望ましい仕事場の偏在もあって，10 代後半や 20 代前半にもなると，生まれ育った場所ではないところでの仕事につく男女が多くなる。

例えば 22 歳のリンダは，教会関連の印刷所付属の書店で販売員として働くようになった。以前同じポジションで姉が務めていたこともあって，仕事場や仕事内容はよく知っているものだった。しかし勤務先は自宅から車で片道 2 時間半の場所にあるため，彼女は平日には知人の家族の家に下宿し，週末は家に帰ることとなった。こうして仕事を契機にリンダは，一時的ではあるが生まれ育った地域や教会コミュニティーと離れた場合で生活を始めることとなった。

リンダのように自宅から離れて生活を始めるようになると，シングルの人たちの友人関係はずっと広がる。自分の育った教会以外のコンサーバティブ・メノナイトの人たちと仕事場や日常生活で頻繁に出会うようになるからである。そうした若者を受け入れる教会コミュニティーの方も，転居に伴う様々なサポート体制をとっている。リンダのように多くの場合，男女ともすぐに一人暮らしとなるわけではない。地域によっては一人暮らし用のアパート物件が少なかったり，家賃が高かったりという事情もあるが，それ以上に若者が一人で暮らすことによって，孤立し，信仰生活に悪影

響を及ぼすことを避けたいという配慮による。たいてい関連する教会の知人宅で，空き部屋があるところが下宿先となる。

下宿先での生活は，新しいコミュニティーでの生活へのスムーズな移行のための工夫がなされている。転居してきた人たちは，下宿先で個人の部屋が与えられ，一定のプライバシーが尊重される。食事は下宿先の家族と共にし，掃除やその他の家事を手伝うことが期待されるが，それ以外の時間は下宿人の判断で使うことができる。時には例えば，友人と買い物に出かけたり，ちょっとした旅行に出かけたりすることもある。一方，そういった自由とともに，食事やこまごまとしたところで下宿先の家庭との接触があるため，下宿人には何かと相談事にのってもらうことができる相手がいる。もちろん，下宿先の人は若い下宿人のことを気にかけているし，必要ならば助言をすることもある。転居してきた若いシングルの人にとって，下宿先の人々は第二，第三の家族のような知人になる場合もあり，シングルの人はそこを拠点としても人的なつながり深めることができる。

例えば20代半ばのベサニーはほかの家族と生活できてよかったと語る。家族が住むオハイオ州から離れてペンシルバニアでの仕事を始めた彼女にとって，なんでも自分一人で考えて行動しなければならないのは当時大変な重荷だったそうだ。下宿先の夫妻の助言や指示を仰ぐことができることは，それがたとえ家事や掃除といった一般的な作業の指示や手伝いであっても，精神的にありがたかったそうだ。

リンダの場合は週末に自宅に帰ることができる距離であったが，ベサニーのように20代前半ごろとなると，さらに離れたところに転居する人も多くなる。転居のきっかけは様々であるが，多いのがコンサーバティブ・メノナイトの学校の教師として働かないかとの要請や，同居して老夫婦の家事手伝いをしてくれる人を探しているとの問い合わせである。またこのころになると，転居先の生活も長くなり，仕事も長期的なものとなる。

20 代中頃ともなると，若い人の中には結婚する人も出てくる[9]。結婚する相手がいなくてもシングルの男性の中には結婚を見据えた職業の選択をする人が多くでてくる。大工，家具作り，自動車エンジンなどの修理といった技術を身につける職に進むものもいる。また，そういった職業経験をもとに，事業者として自分のビジネスにつながる仕事を見つけていく場合が多い。 この年頃の男性はしばしば，将来的に家族との生活を支えていくことのできるかどうか，そして家族で暮らすのに適した教会コミュニティーかどうかについて考慮しながら，日々の生活や仕事をしている。

結婚していないシングルの女性たちの多くも，この頃になるとフルタイムの仕事を持ち，その収入で生活し始める。女性の中にも自分でビジネスを持つことを考えている人ややフリーランスで自分なりに仕事をしようとする人もいないわけではないが，従業員として働いている場合が多い。老人ホームの職員，教会付属学校の教員，清掃担当者，食料加工会社といった作業所での職員，事務員や小売店の販売員などである。こういった仕事に加えて，時間があるときにはほかの教会員の家庭での清掃，子供の世話などを手伝い，副収入を得る人も多い。

勤務経験もそれなりに積んできた20代半ばから30代の女性の中には，家族や下宿先を離れ，各自で生活をし始めるようになる人も出てくる。シングルの女性たち数名で家を借りて住んでいる場合もあれば，アパート部分は別だが，建物自体にはほかの教会員が住んでいるところに暮らす人もいる。たいていほかの教会員が近くにいる場合が多く，全く一人で暮らしている状況は少ないが，下宿と異なり，食事など，すべてにわたって自分で行うような生活となる。政教分離を重視するコンサーバティブ・メノナイトの間では，政府の援助を受けないで生計を立てることが重視されるた

め，シングルの人たちがしっかり自立できることは，立派な教会員の一人としての資質を示すことにもつながる。

このようにシングルの人が自分たちの「家」を確立したころには，教会での仕事もシングルの個人単位で分担されるようになる。コンサーバティブ・メノナイトの間では，教会の掃除や特別な行事の際の食事の提供といった仕事は，通常家族単位で振り分けられる。下宿しているときは，下宿先の家族とともにその仕事を分担することもあるが，シングルの人たちが自分で生計を立てているようになると，同じようなシングルの人との組み合わせで，その仕事を分配されるようになる。こういった役割を果たすことも，シングルの人が教会の一員として広く認められるようになるプロセスの一つに含まれる。

もちろん，依然としてほかの教会員の人たちはシングルの人たちの様子に気を配り，助言をすることも多い。日曜日の礼拝後や何かの行事があれば，シングルの人たちを自宅に招き，食事をしながら様子を聞いたりする教会員も多い。また季節の変わり目には大掃除の手伝いを依頼することによって，彼女たちの様子をさりげなく尋ねる場合もある。そういった機会を利用しながら，シングルの人が孤立していないか，また信仰生活から離れてしまっていないかと配慮しつつ，彼女たちの様子を見守っている教会員は多い。

Ⅳ. シングルとして暮らすこと

これまでは一般的にシングルとなるプロセスを見てきた。一定のプロセスを経て徐々にシングルになっていく彼女たちと，彼女たちの状況の変化に合わせて周りの教会コミュニティーが対応している様子を紹介した。ここではシングルの女性たちの様子について，いくつかの例を挙げながら具体的にシングルとして暮らしていく彼女たちの姿を追っていく。シングルの女性の場合は，男性とは違い独立してビジネスを起こすことは少ない。しかし彼女たちも新たな展開を求めて転居したり，転職したりする場合がある。20 歳後半ともなると，友人の中には結婚した人も多い。自分はひょっとすれば結婚せず暮らしていくのかもしれないとの思いつつ，今後の生活をどのようにしようかと考え，何らかの生活の変化を体験したと語るシングルの女性は多い。

32 歳のエリザベスはそういった過渡期の女性のひとりである。年老いた祖父母の面倒を見るため，エリザベスは他州からペンシルバニア州のランカスター郡に 20 歳半ばで転居した[10]。彼女はそれ以前，自分が育った地域の教会学校の教員として生活をしており，その仕事を続けることもできた。にもかかわらず転居を決めた理由を，自分自身，何か変化が必要だと感じたからだとエリザベスは語った。ちょうどそのころ，エリザベスの祖父母が高齢のために日常生活の介護を必要とする状況となり，彼女は転居を決めたという。彼女は自分自身の進むべき方向について祈り，「神様のお導き」を望んだところ，祖父母の手伝いの話しを聞き，それに応じることこそ神様も喜ぶ彼女の進むべき道だと思ったそうだ。

祖父母のために転居した彼女だったが，ランカスター郡に移って一年もたたないうちに，祖父母は医療施設で専門のケアを受ける状態となる。転居の事情が解消された訳だが，彼女はそのままランカスター郡に残り，教会関連の出版社の編集の仕事をするようになる。長年教師として働いてきた彼女は，編集の仕事は自分に向いているだろうと考えたそうだ。そこで数年働いている間も彼女は時折，冬季聖書勉強会に出席する教員の代理として，短期的にほかの州で教員として働いた。数年後，彼女はバージニア州の教会学校の要請に応じる形で，教員として働くこととなり再び他州に転居することとなった。

過渡期の女性の中には，ボランティアサービスワーカーとして他州に転居する人もいる。ケンタッキー州で育ったアンナは，20 代半ばで，教会関連の出版社で印刷業務の補助としてペンシルバニアに移り住んだ。一年後，今度は同じ場所で有給の仕事が見つかり，続けてそこに住むようになる。生まれ育った地を離れてペンシルバニアに転居したことについて，アンナはいい機会だったと語る。ペンシルバニアではコンサーバティブ・メノナイトの教会も多く，教会員の若者に適した働き口が多くある。それと関連して彼女と同年代のシングルのメノナイトの女性も多く，暮らしやすい。アンナのほかにもそういった理由でペンシルバニアやそのほかのコンサーバティブ・メノナイトの多くいる地域に移り住む人は多い。

エリザベスやアンナの例のように，20 代後半から 30 代前半の女性の多くは，転居や転職を経験して，徐々に自分に合った場を見つけて生活を始める。コンサーバティブ・メノナイトの女性たちの仕事の種類は決して多くない。子供や高齢者の生活補助，教員，事務職，小売業での店員などである。また前述したように，男性と違って独立してビジネスを始めるケースは少ない。起業に関して教会の決まりで禁じられているわけではない。しかし女性は男性のサポート役をすべきだという見方が強いからか，コンサーバティブ・メノナイトの中では女性の企業家は少なく，そのほとんどが従業員として生計を立てている。彼女たちには補助的な業務が与えられることが多く，技術的にあるいはポジションの性質上，独立に向けた経験を積むことが少ないことも多い。そのような状況もあって，シングルの女性のこうした動きは一見すると，積極的に選択したというよりも，必要とされている仕事に受け身的に応じて暮らしていっているように映るかもしれない。しかしシングルの女性たちの話を聞くと，現実は必ずしもただ必要とされている状況に応じるだけではないことがわかる。エリザベスやアンナのように，時には自分の意志で転居したり，転居先での生活を継続したりして，自分に適した場へ動き出している場合がある。そして転居先で彼女たちは知人を増やし，新たなネットワークを作りだしている。

エリザベスやアンナよりももっと積極的に自分たちの仕事ややりがいを求めて行動を起こすシングルの女性たちもいる。30 代半ばのウィスコンシン州出身のグレースはその一例である。グレースは事情があって親と暮らせない子供を預かる里親として暮らしている。主に心身に病気や障がいを持った子供たちを預かっている場合がほとんどで，そういった子供たちの世話をすることで得られる一定の手当を中心に生計を立てている。兄弟姉妹がたくさんいる家庭の長女として育った彼女は，子供たちの面倒を見ることが得意で，精神的，身体的，そしてスピリチュアルなケアを必要としている子供たちの世話をすることで生計を立てられたらと早くから考えていた。

しかし当時のウィスコンシンでは州法によって，そういった子供たちを預かるのには，里親が保険に加入する必要があった。コンサーバティブ・メノナイトの間では，宗教上の理由から保険に入ることは禁止されており(Scott, 1996)，ウィスコンシン州で里親として生計を立てることができないと知った彼女は，保険加入が必要ないペンシルバニア州に移ることにする。ペンシルバニアはウィスコンシンからは遠く離れているが，彼女の両親がもともとそちらで住んでいたので親戚や知人もおり，転居先としては好都合であった。ところが，転居後に里親サービスのあっせん業者に登録をしようとしたところ，業者の規定により里親となるためには 25 歳以上でなければならないことを知る。当時 25 歳未満だった彼女は，そこでペンシルバニアの教会学校で数年間，教員として働き，その後ようやく里親としての仕事を始めるようになった。

その後里親として経験を積んだグレースは，ほかのシングルの女性とともに一軒家を借り暮らしている。自身の仕事についてどのように考えているのかと尋ねたところ，グレースは里親の仕事を

子供たちに信仰を伝える一つの場として考えていると答えた。彼女は説明を続け，日々の生活の中をともにしながら，子供たちに聖書の物語を読み，派手でなく，控えめな服装の大切さを教えているという。またできる手伝いをすることを教えることで，社会に役立つことの重要性を伝えられたらと語った。預かっている子供たちは，コンサーバティブ・メノナイト以外の家庭に養子として迎えられたり，施設で再び保護を受けたりすることが多く，教会にとどまることは少ない。だがグレースは子供たちの心のどこかに，神様の存在や神様の役に立つ生き方の重要性，そして政府の援助に頼らず自分で生計を立てようとする大切さを覚えていてくれればと思っていると語った。

20 代半ばのエイミーは，グレースのように自分から望む仕事にいつかは就こうとしているシングルの女性である。エイミーはメノナイトではないキリスト教系の宣教師の両親のもと，南米で育った。その頃，コンサーバティブ・メノナイトの出版社が出した本を読み，心を動かされて，その著者が生活し，そういった本の出版社のあるペンシルバニア州に転居した。その後，コンサーバティブ・メノナイトの教会とコンタクトをとり，他のシングルの女性と暮らし始めて数年になる。彼女は家庭教師や会社の事務の仕事をこなして生計を立てているが，長期的には障がいを持つ子供たちのための特別支援教育の教員として働きたいという希望を持っている。機会があればペンシルバニア周辺でのメノナイト教員のための勉強会に出席したり，また特別支援教育に長年携わってきたことで知られている教員を直接尋ねたりして，知識と経験を積んでいる。エイミーは，特別支援教育の教員となることで，教会の子供たちの学習を支えていくとともに，子供たちの信仰を深める助けをできればと考えていると語る。

必ずしも人数としては多くはないが，グレースやエイミーのように，より積極的に自分の場を見つけるシングルの人たちもいる。もちろん現実には彼女らのような希望が必ずしもかなうことはなく，また教会によっては彼女たちの希望に対して助言という形で方向転換や調整を要請することもある。一時期里親となって生計を立てようと考えたネオミのケースはその一例である。グレースよりも少し年配のネオミは，グレースとは違い子供の取扱いがそれほど上手ではなかった。そのことをよく知っていた教会の人々は，里親としての仕事の選択はネオミにとってあまりふさわしいものではないと考えた。そこで教会役員らの協議の結果，そのことをネオミに伝え，仕事の再考を促した。結局，ネオミはそうした助言を受け，別の仕事をするようになった。

このように場合によっては教会がシングルの女性たちに助言を与えることがある。仕事の選択以外でも同様で，シングルの女性が里子として預かっていた子供を養子にしようとした際に，教会の判断を仰ぐこととのなったケースもあった。 シングルの選択は，時には教会や教会員からの助言や制限を受けることがある。

教会員の意見や助言を受けることはシングルの人に限ったことではない。コンサーバティブ・メノナイトの教会では，個人個人の選択であっても，それが教会コミュニティーの信仰生活に関連するような事柄に関しては話し合いがなされ，協議の結果に基づき助言や勧告等を受けることがしばしばある。例えば多額の借金を負った事業の展開などは，教会全体がその負債を負うこととなりかねないので，教会の懸念事項となる。また犬のブリーダービジネスについては，ペット中心の生活を助長し，信仰へと人々を導かないとし，好ましくないとされ教会の助言がなされた[11]。ネオミの場合は，里親という仕事がうまくいかずに苦労するのではという懸念もあったが，仕事が失敗した時の教会コミュニティーへの影響への考慮もあったと考えられる。

しかし，シングルの当事者が女性であることからくる教会からの介入や制限もある。聖書の解釈に基づき，コンサーバティブ・メノナイト教会では，女性はあくまでもサポートとしての存在とし

て扱われる。教会でのリーダーシップは男性に限られ，正式な教会員の話し合いや取決めは，男性の教会員のみが参加できる。未婚の男性でも教会員ならば参加できるのに対し，シングルの女性の教会員がそこで直接自分の意見を伝えることはできない。もちろん多くの場合，既婚者は妻の意見を聞き，彼女たちの意見を踏まえながら話し合いをする場合が多い。しかし教会での意思決定過程には直接かかわることができないシングルの女性たちは，あくまでも結果としての助言をうけて，それに従うことを要求される立場でしかない。

そういった制限の中でも，多くのシングルの女性たちは様々な仕事を通じて，教会コミュニティーに関わっている。エリザベスやアンナは，教会や教会関連施設で必要とされている仕事をこなし，働いている。やりたい仕事をより積極的に探しているグレースやエイミーにおいては，自分の希望を追求しつつ，教会での教えを里親として教会以外の子供たちに広めたり，支援の必要な子どもへの教育を通じて伝えようとしたりしている。シングルの女性たちは様々な方法で，信仰コミュニティーの一員としての活躍の場を模索しているともいえる。

V. シングルを離れる時：教会コミュニティーからみるシングル

ではそういったシングルの女性たちの働きを，教会を中心としたコンサーバティブ・メノナイトのコミュニティーはどのようにとらえているのだろうか。彼女たちを取り巻く教会の人たちは，できれば彼女たちも結婚し，家庭を持つ方がよいと思っているのだろうか。冒頭に紹介したサラの結婚式前後の様子を取り上げながら長年シングルとして暮らしてきた女性がシングルを離れるときの様子を見ていきたい。

冒頭に紹介した 54 歳のサラは，シングルとしての生活も長い。ペンシルバニア州で生まれた彼女は，学校を終えたのち，しばらくは生まれ育った両親の家で暮らしながら，事務の仕事，農場の手伝いなどをこなしていた。その後，生家から車で数時間離れたところの教会学校で教員として働かないかとの声がかかる。サラは要請に応じ，生家をはなれて下宿生活を数年送る。教員としての仕事は継続して勤務できる可能性は高いが，基本的には一年ごとの契約更新で，また学校に入る子供たちの数などで担当や仕事量が左右され，それほど給料が高くない仕事である。そういう事情もあってか，教員の中には前述したエリザベスのように，教員をいったん止め，一時的，あるいは長期にわたって別の仕事に就く人も多い。サラも時には生家に戻り，ほかの仕事をしていた時もあった。この間，サラ自信は結婚の可能性も少し考えていた。しかし，生活を共にしようと思えるような相手からの交際の申し込みはなく，その後も生家で仕事をしたり，いくつかの教会学校の教員として日々を過ごしたりしていた。

1998 年，サラはマサチューセッツ州の新しくできた伝道色の強い教会を中心にしたコンサーバティブ・メノナイトのコミュニティーに転居する。この地域にはコンサーバティブ・メノナイトの人々が少なく，彼らの信仰や聖書の教えを知らない人々が多かった。そういった人たちに教えを広めようと，いくつかの家族が移り住んだことがこの教会コミュニティーの誕生の背景の一つであった。また近くに住むロシア系移民のキリスト教教会からの要請も教会発足のきっかけとなっていた。1990 年後半から 2000 年代前半にかけて，その地域のプロテスタント系キリスト教徒のロシア系の移民の間では，自分たちの子供たちを公立学校に送るのではなく，自分たちの信仰に基づいた学校で教育をおこないたいという動きがあった。そこで聖書に基づく学校運営の経験があり，宗教的考え方にも類似点が多い，コンサーバティブ・メノナイトの人に援助を求め，教員を送ってほしいとの要請があった。それまで長年教員として勤務し，ロシア語や伝道活動にも興味があったサラはそ

れに応じる形で，マサチューセッツに移る。当初は現地の教会員の老夫婦の家の地下に，彼女と同じように教員として働くシングルのメノナイトの女性とともに下宿し暮らし始めた。

マサチューセッツのロシア人学校で数年働いたあと，2002 年から 2003 年にかけて彼女は健康状態がすぐれない両親の世話のために再びペンシルバニアに戻り，農場の手伝いや教会関連施設の印刷所で働く。両親が亡くなり，2004 年にサラは再びマサチューセッツへ転居する。そのころには現地のメノナイト教会も大きくなり，子供たちも増え，彼女はコンサーバティブ・メノナイトの教会付属学校の教員として働くこととなる。2006 年にはサラは自分の家を購入し，教会学校の先生や現地の教会に働きに来ている若い女性を下宿人として，マサチューセッツの教会の一員として暮らすようになる。

このように 2010 年ごろまでには，自分の家を持ち，しっかりとした仕事をし，教会の行事にも積極的に参加していたサラは，シングルとして自分の場をマサチューセッツの教会で確立していた。もちろん親戚との付き合いはあり，たびたび生まれ育ったペンシルバニア州を訪れることもあった。だが彼女の家や教会はマサチューセッツにあり，おそらく今後も彼女はそこでシングルとして過ごしていくのだろうという思いは，私だけでなく彼女を知る多くの人が感じていた。サラの結婚を聞いた時の感想を，20 代後半で自分自身もシングルのサラの姪は，考えられないことが起こったので何が起こるかわからないねと語っており，サラの周囲の人の驚きをうかがうことができる。

サラとのちに夫となるグレンとの交際は 2016 年 6 月から始まる。コンサーバティブ・メノナイトとしては比較的短い交際期間を経て，サラとグレンは 2017 年 1 月に結婚した。もともとグレンはサラの生家の近隣の出身であったため，お互いの出身や家族について少しは知っていたものの，15 歳違いのこともあり個人的には深く知らなかった。2014 年，グレンの妻マーサは脳卒中で急死する。悲しみに暮れる彼に再婚を促す友人もいたが，しばらくグレンは一人で生活していた。教会の指導者的な立場のグレンは，各地の教会を訪問することがあり，サラとはマーサの死後，サラの所属教会を訪問した際に出会った。その後グレンはサラを特別な女性と感じるようになり，サラの教会の牧師や役員に問い合わせをした後，サラに交際を申し込む手紙を送り，それにサラが答える形で交際が始まり，その後の結婚となった。

コンサーバティブ・メノナイトの結婚式は，料理，会場設備，司会，席案内等，専門業者に頼むのではなく，すべて自分たちの手で行われる。結婚の当事者の親戚，友人のうち，適任だと思われる人に個人的に依頼があり，それぞれが協力して式の進行を進める。費用は新郎と新婦やその家族が負担する。会場では装飾も少なく，ウエディングドレス等も手作りである。他の結婚式と比較してもサラとグレンの結婚式の式次第などは標準的なものであったが，サラやグレン自身の体験から，ほかの結婚式ではさほど見られない配慮があり，次の 2 点はそういったサラたちの心遣いを感じさせるものである。

一つ目は，シングルの人やグレンのように結婚をしたが配偶者に先立たれた人に対しての配慮である。結婚式やその後の披露宴での席の配置は家族ごとに行われるため，シングルの人は孤立しやすい。当日の席案内担当者に対しては，シングルの人でも会話が弾むような場所に招待客を案内するようにという指示があった。実際，シングルの人や配偶者をなくした人，再婚を考えている交際中の男女のカップルも当日参加しており，それぞれ案内係の指示に従い，テーブルに案内された。

二つ目は，結婚後転居するサラが，新しい教会や家族関係の中になじめるようにという工夫である。今回の結婚にあたって，サラは結婚後，グレンの住むテキサスに移り住むことになっていた。サラはそれまでテキサスに住んだことがなく，グレン側の家族や教会のコミュニティーにも知り合

いが少ない。このためサラをよく知らない家族や教会員が多く，サラもサラの友人たちも，少しでもサラの人となりをグレン側の家族や知人に知ってもらえればと考えていた。そこで結婚を直前に控えた女性に物品を贈る通常のブライダルシャワーではなく，代わりにサラとの思い出やレシピをカードに書き込んでまとめたものがつくられ，結婚式の前日に展示されていた。サラ側でもグレンをよく知らない人がいたが，結婚式がサラとグレンがともに育った地域で開かれたためか，遠方のテキサスなどから来るグレン側への配慮の方が中心であった。

もちろんこれらの配慮はほかの結婚式でも見られないことはない。しかし長年シングルとして生活してきたサラや彼女を知る周囲の人にとって，シングルの人が疎外感を感じたり，特別扱いされたりせず，溶け込めるようにというサラとグレンの想いがうかがわれる。

一方，結婚式やその後の披露宴ではサラとグレンの人柄や信仰生活について，説教を通じて参加者に紹介された。これらのスピーチは事前にグレンとサラの所属教会や関連教会で指導者的な役割を担ってきた２人の男性に依頼されていた。が，そこでの説教の内容は，当事者も周囲の人もはじめて具体的に聞くものだった。これらのスピーチは，参加者すべてに対して語られる点で，サラとグレンに対する公のコメントという性質を備えたものだった。

結婚式での彼らのスピーチは全般的にグレンよりもサラに焦点を当てた点が多くみられた。一般的な形式は踏んでいるものの，結婚によって今までとは全く異なった生活を送ることとなるサラについて語られた内容が目立ったものであった。結婚式でのスピーチは２つあり，一つめは導入的なメッセージとしてのお話，それに続いて２つめはメインの説教という形で結婚の宣誓の前に行われた。

メッセージとしてのスピーチはジョンが行った。ジョンはサラの両親が所属していた教会出身者で，教会の指導者として長年活躍し，現在は香港に住み，そこで伝道活動を行っている。サラのペンシルバニア時代の様子とともにマサチューセッツでの生活もよく知っている人物である。ジョンの話は，結婚式当日の 2017 年 1 月 20 日に行われた大統領の宣誓式の言及から始まった。サラの結婚式は偶然にもアメリカのトランプ大統領の宣誓式が行われた日と重なった。そこでジョンはサラとグレン以外にも宣誓をする人がいることを述べた後，それと対比させてグレンとサラは聖書に基づいて夫婦となることを神に誓うのだと話を始めた。続けてジョンは，サラの人となりと結婚を神に誓うことについてことの重要性について語り始めた。ジョンはサラが今までの生活の中で，自分自身で判断下すということをしてきたと述べ，サラが一人の教会員として生活してきたことについて触れた。そして，それまでの生活の中では決断することが難しいものもあっただろうが，サラはよい判断をしてきたと語った。具体的な例はあまり述べられていないが，サラを知る人ならば同意するような口調で，サラが思慮深く，信仰者としてふさわしい生活を送ってきたことを暗に参加者に訴えた。そしてそういったサラの生活を踏まえたうえで，ジョンは少し話のリズムを変えながら，今日結婚を神に誓うことによってサラの生活は一変するだろうと述べた。サラはそれまで自分で決定を行ってきたが，今後は妻として夫であるグレンにその決定権をゆだね，家庭のかしらとしての夫に従うという服従の態度を学ぶこととなると述べた。このようにジョンは，結婚することによってサラが夫であるグレンに従うことの重要性を指摘し，結婚がサラのそれまでの生活や行動に大きな変化をもたらす信仰者として重大な出来事であることを強調して話を終えた。

続いてルークが説教を行った。ルークはグレンの教会の指導者で，グレンと前妻のマーサをよく知る人物である。彼はまずグレンとマーサが，教会コミュニティーにとって，そしてルーク自身にとっても，非常に重要な存在であったことから説教を始めた。マーサがこの世から旅立った悲しみ

や喪失感は未だに大きいものであると語り，マーサの存在を私たちは決して忘れるべきでないと述べた。ルークの話でマーサのことを思い出したのか，グレン側の家族からはすすり泣きのような声が聞こえ出した。ルークは続けて，サラはマーサとなることはできないと言い，グレンの子供たちや孫たちの中には，サラを母親としてまた祖母としてすぐに思うことができないという人もいるだろうと語る。しかし，とグレンは続け，それはそれでよく，サラはサラとしてその存在を認めていくことが重要であるとして話を終えた。

その後すぐにルークによって結婚の宣誓の儀式が行われた。ルークが結婚の誓いに関する質問をグレンとサラの両者にし，両者がそれに答え，グレンとサラが夫婦となったことが宣言された。参加者はそれを受けて，讃美歌を歌い，グレンとサラは会場を退出し，その後，式を取り扱ったジョンとその妻とルーク，グレンとサラの親戚，そして参列者の順番に会場を後にし，式は終了した。

サラの結婚式で特徴的なのは，ジョンとルークの二人ともサラの生活や立場が結婚によって変わるところに焦点を当てていることである。話の内容はそれぞれ異なる点もあるが，サラ自身が一人の教会員として，教会コミュニティーに貢献し，信仰者として神や聖書の教えに従ってきたことで一致している。そしてまた前妻のマーサの代わりとしてではなく，サラ自身の存在に焦点があてられている。それに加え，結婚に伴うサラの変化についても触れられており，ジョンはサラが今まで独立したシングルとしての立場から離れ，これからはグレンの妻として，グレンに仕えていく立場の変化の重要性を述べている。ルークに関しては，マーサの存在を尊重しながら，グレンの家族の一員として，サラが新たな生活を送ることが述べられている。サラと比較してみるとグレン自身についてはほとんど言及されていず，また彼の生活が再婚によってどのように変わるのか言及されていない。結果的に，グレンは今までの生活を続けていくのだという印象を受けないではない。変化の大きさはシングルの女性の方が大きく，また重要なものであるとされていることがうかがわれる。

結婚式の後に行われた披露宴でも，これからサラの生活が大きく変わることに関する話が登場した。披露宴ではサラ側から２名，グレン側から１名の代表者によってスピーチが行われ，最後にはグレン自身がスピーチを行った。サラ側の２名はマサチューセッツのサラの所属教会役員で，どちらもサラが新しい地に旅立っていくことに対して，思いやりのこもったメッセージを贈った。最初のスピーチを行ったサラの教会の牧師のマーティンは，自分の両親の再婚の際の様子を語り，サラにとっても新しい家族での役割に慣れるのは大変であろうから，暖かく周囲の人は見守ってほしいと語っていた。

しかしそれに加えて披露宴では，サラがいかにかけがえのない教会員であったかということが述べられていた。マーティンに続いてスピーチを行ったリチャードは，サラからもグレンからも結婚について相談を受けていた様子から話を始めた。マーティンと同じように教会の役員であるリチャードは，サラの人柄についてグレンから問い合わせを最初に受け，サラとグレンとの交際についてもっとも早い段階から知っていた。そういった経緯を話しながら，リチャードは続けて彼自身のサラに対する評価を語り始めた。サラはそれまでに立派な教会員として活躍しており，また教会付属学校の教員として，教会コミュニティーとしては欠かすことのできない存在であったと述べた。続けてリチャードはサラが感じたであろう不安や心配について語り始めた。彼はサラが結婚を決意するまでの間に個人的に相談を受けていたことを明かし，サラがマサチューセッツの教会やコミュニティーでの自分の生活に満足しており，そういった生活を離れ，新たな方向性に向かうことに対する不安を持っていたことをリチャードは語った。しかし，とリチャードは続け，そのような不安を乗り越え，自分の判断で結婚することを決めたサラの決心を尊重すると述べ，グレンとの結婚生

活が幸せであるよう願うと語った。続けて，サラが結婚後テキサスに移り，自分たちの教会から去ってしまうことについて，寂しく感じると語り，サラは教会の子供たちにとっては素晴らしい先生であって，彼女を失ってしまうことについて，教会全体は少し残念な気持ちもあることの思いを参加者に伝えた。そして，ぜひグレンと一緒にテキサスでも活躍してほしいと話を締めくくった。

リチャードのコメントはシングルから結婚して妻となる変化だけではなく，コミュニティー側からみたシングルとしてのサラに対する思いが垣間見られる。よき先生として，またよき教会員としてのサラの様子を紹介することで，シングルであるサラがコミュニティーにとって重要な存在であることを伝えている。もちろんすべてのシングルの人がサラと同じように，コミュニティーにとって欠かすことのできない模範的な存在とは言えないのかもしれない。しかしリチャードが語ったサラの結婚を機にコミュニティーが感じる喪失感や寂しさは，シングルの人がシングルとして，教会コミュニティーで重要であることをうかがわせる。

シングルという立場を離れるサラについてのコミュニティーの見解をジョン，ルーク，マーティン，リチャードの４人のスピーチから考えるのには限界がある。しかし彼らは，教会でも重要な役職を担っている指導者であること，そして彼らすべてが結婚し，子供がいる男性であることから，彼らの話は，少なくとも教会コミュニティーの中での重要な見解の一つを物語っているといえる。ジョンのコメントの一部では，サラがそれまで一人の信者として適切な選択をしたこと，そしてリチャードのスピーチでは，サラが教会やコミュニティーに貢献してきたことが述べられていた。そこからシングルのサラが，一人の教会員として，重要なコミュニティーの一人として認識されていたことがうかがえる。さらにそれが結婚式という公の場所で話すことができるほど，ある程度コミュニティーで共有されていたこともうかがえ，サラがシングルとしてコミュニティーである一定のポジションを占めていたことが語られている。加えてルークのコメントからも，サラは亡くなった前妻の代わりではないことが強調され，サラ自身の存在が強調されている。

ジョンとマーティンのスピーチでは，結婚によってもたらされるだろうサラの人生の変化が強調されている。そこではシングルを去り，結婚するということが必ずしも容易な選択ではないことが伝えられている。逆に，このことからシングルという立場が，必ずしも結婚にいたるべき過渡的なものととらえられていないこともうかがわれる。

冒頭で述べたように，シングルの女性の人の声はしばしば取り上げられず，また前述で紹介したブックレットの表現のように，考えもしなかった人生のステージのように描かれる場合がある。しかしそのような見方は，実際のシングルの女性の人々の感じ方や，コミュニティーの認識とは少し異なる。シングルの女性たち自身の多くは，仕事や奉仕活動を通して，信仰コミュニティーの一員となろうと考えている。またサラの結婚式のスピーチからうかがえるように，コミュニティーの側も彼女たちの存在の重要性を認め，シングルのサラの新しい門出に対して，祝福とともに，彼女がいなくなることに対する寂しさを感じている。

Ⅵ．シングルとコンサーバティブ・メノナイトコミュニティー

聖書の解釈に基づき，男性のリーダーシップを尊重し，妻や母としての役割を重視するコンサーバティブ･メノナイトのコミュニティーでは，シングルの女性の活躍できる場に様々な制限がある。教会の重要事項の決定プロセスには直接参加できず，またシングルの人の動向はほかの教会員の温かくも時には厳しい目にさらされていることが多い。職業選択の幅もそれほど広くなく，高等教育を受け専門職に就く可能性も限られているため，一般的なキャリアを通じた活躍も難しい場合が多

い。またそういった状況に加え，シングルの人に着目した書籍や記録が少なかったこともあって，シングルの人たちについては深く考察されることが少なかった現状がある。

しかしシングルの人たち自身の話やサラの結婚をめぐる人々のスピーチからは，彼女たちが必ずしも取り残された存在ではないことがうかがえる。グレースやエイミーのように自分に合った仕事を追いかけているシングルの人もいる。またエリザベスやアンナのように転居をしつつ，各地の教会コミュニティーで必要とされている仕事をこなし自分の場を見つける人もいる。一方，サラの結婚式でのスピーチでみられるように，彼女たちの働きはコミュニティーのほかの人にとっても高く評価されている時もある。そして彼女たちが結婚等で去っていくことに対しては複雑な感情がありうることがうかがえる。

これらの点を考慮すると，シングルの人たちはむしろシングルであるがゆえに信仰コミュニティーにとってなくてはならない存在となっている場合があるのかもしれない。信仰を中心としたコンサーバティブ・メノナイトのコミュニティーでは，アンナやサラのように教会の仕事のために転居をしてまでも奉仕する人材は欠かせない。もちろん，宣教活動など教会に関わる活動はコンサーバティブ・メノナイトコミュニティー全体で重視され，シングルでない多くの人も何らかの形で携わっている。しかし結婚し，家庭を持つ人たちの中には，生活の拠点を移してまで教会や宣教活動に従事することがなかなかできない場合がある。その点シングルの人たちは，シングルであるがゆえに比較的自由に，そして柔軟に対応することができる。アンナやエリザベスやサラのように教会関連施設の職員や教員を必要としている教会地区へ転居することもできる。教会関連施設の仕事は必ずしも給料等の経済的な見返りが高くない活動多いが，そういった仕事にも，家族の生活を支える必要性がそれほど高くないシングルの人は従事しやすい環境にある。もちろん経験を積んだ年輩者の人からの助言や励ましは欠かすことができないが，シングルの人たちはコンサーバティブ・メノナイトコミュニティー全体における中心的な活動に携わっていることが多い。

加えて各地のコンサーバティブ・メノナイト教会を行き来することができる彼女たちは，時として教会の間を結ぶ重要な架け橋となる。もちろんシングルでなくても各地の関連教会をめぐる教会員は多いし，教会の指導的な役割に立つ人ならなおさらそういったネットワークを大切にし，交流を図っている。ただそういったネットワークを深く築く際には，現地にいる人の存在が欠かせない。シングルの人は，仕事等で様々な地域で生活をし，経験を重ねることで，各地域の教会の人々との関係を築きあげる機会に恵まれることが多い。若いシングルの人なら現地の教会員と結婚してネットワークを広げることもある。そうでないシングルの人も仕事や教会での活動を通じて，交流の機会や場をつくるきっかけを提供する。そうしたシングルのひとつながりは，彼女たちの生まれ育った教会にも持ち込まれ，さらに広い人々のネットワークの一部となっていく。

確かにシングルの人たちは，そのすべてがいずれ妻として夫を支えたり，母として子供を教会員として育てたりすることはないかもしれない。しかしシングルの人たちは，シングルであることから教会コミュニティーの重要な一部として存在している。教会や信仰コミュニティーで必要とされている仕事に従事し，また各地での転居を通じて，教会や家族を越えた広い信仰コミュニティーでのつながりをつくりだしていることに深くかかわっているのである。

信仰を基盤として発展してきたコンサーバティブ・メノナイトにとって，信仰による広いつながりは，コミュニティーの継続と発展に欠かせないものである。そういったつながりは従来の親族関係を基調とした血縁や，地理的近く日常生活の場を中心とした地縁を含む各教会でのつながりと重なりつつも，異なるものである。シングルの人たちは教会や信仰コミュニティーで必要とされてい

る仕事に従事し，また各地での転居を通じて，教会や家族を越えた広い信仰コミュニティーでのつながりをつくりだしていることに深くかかわっている。そういったつながりを形成するのはシングルの人に限ったことではないが，シングルの人の体験を考察することは，コンサーバティブ・メノナイトにとってのつながりやコミュニティーの特徴をより詳しく理解するための糸口となるといえる。

注

[1] プライバシー保護のため，この論文でのコンサーバティブ・メノナイトの人々の名前はすべて仮称である。この論文での年齢はほかの注がある場合を除きは 2017 年当時のものである。
[2] 教会付属の学校の教員に対しては，教室内外でシスターやブラザーという敬称が使われる場合が多い。
[3] 例えば，椎野ら編（2014）では，辻上奈美江によるサウディアラビアのケースと岡田あおいによる江戸時代の農民社会のシングルについてのケースについての考察がある。
[4] Epp, M. (2008). *Mennonite Women in Canada: A History*. Winnipeg: University of Manitoba Press 61 頁から引用。
[5] 例えば Valerie Weaver-Zercher は著書 *Thrill of the Chaste: The Allure of Amish Romance Novels* (2013) で，アーミッシュやメノナイト題材とした小説を考察している。アーミッシュやメノナイトを取り扱った小説の多くは，結婚を考えている若いメノナイトやアーミッシュの女性たちが主人公として登場する。そして恋愛，結婚，信仰といったテーマが提示され，話が展開されていることが多い。
[6] Coblentz, John (1992). *Singlehood that Glorifies God: Living with Purpose*. VA: Christian Light Publications. 引用は 2011 年の 3rd Printing の 1 頁に基づく。
[7] シングルの女性の職業選択については，Naka (2013) に詳しい分析がある。このセクションでの登場人物の年齢は実地調査時の 2006 年現在のものである。
[8] この点についての詳しい考察は Naka (2009）に述べられている。
[9] 文面化された規則ではないが，一般的にコンサーバティブ・メノナイトの間では，アメリカでの法的な成人とされる 21 歳となってからの結婚を勧める場合が多い。
[10] このセクションの 2005-6 年当時の実地調査結果に基づくものである。登場人物の年齢は 2006 年当時の年齢である。
[11] 例えば Naka (2009) を参照。

引用文献

椎野若菜（2014）.「シングルという視線で家族・社会をみる」 椎名若菜ら編, (2014), 『シングルのつなぐ縁：シングルの人類学２』京都：人文書院 (pp.5–18).

Edgell, Penny & Danielle Docka (2007). Beyond the Nuclear Family? Familism and Gender Ideology in Diverse Religious Communities. *Sociological Forum* 22 (1):25-50.

Fast, K. and Buller, R.E.(2013). Mothering Mennonite and Mennonite Mothering. In R. E. Buller and K. Fast (Eds.). *Mothering Mennonite* (pp.1–19). Ontario: Demeter Press.

Kraybill, D. B., & Hostetter, C. N. (2001). *Anabaptist World USA*. Scottdale, PA: Herald Press.

Naka, T. (2009). *In the World but Not of the World: Virtuous Economic Practices Among Mennonites in Lancaster County in Pennsylvania* (Unpublished doctoral dissertation). University of Iowa, Iowa City, USA.

Naka, T. (2013). “Single Sisters” and Occupations: Singlehood in a Conservative Mennonite Community. In R. E. Buller and K. Fast (Eds.). *Mothering Mennonite* (pp.163–179). Ontario: Demeter Press.

Redekop, Calvin (1989). *Mennonite Society*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.

Scott, Stephen (1996). *An Introduction to Old Order and Conservative Mennonite Groups.* Intercourse, PA: Good Books.

Smith, Dorothy E (1993). The Standard North–American Family—SNAF as an Ideological Code. *Journal of Family Issues* 14, 50-65.